公立高校　募集人員と入試倍率の推移　　確定版

2020年度→2021年度→2022年度

2022. 2. 9

学校名		入試選抜	不合格者数	入試選抜	不合格者数	入試選抜	不合格者数	備　考
		2020年	倍率	2021年	倍率	2022年	倍率	
柏陽	募集人員	318	248	318	116	318	135	志願変更後も倍率はほとんど変わらず、柏陽の進学にこだわる生徒の高いレベルの戦いは避けられない結果となった。
	志願者数	566	1.78	434	1.36	453	1.42	
緑ヶ丘	募集人員	278	128	278	201	278	190	志願変更後において70人程度しか志願変更者はおらず、人気が落ちることがないことが証明されている。
	志願者数	406	1.46	479	1.72	468	1.68	
横浜平沼	募集人員	318	117	318	109	318	163	競争倍率が年々少しずつではあるが上がり、今年も志願変更後は0.06P上がり、歴史ある平沼高校の人気を伺える。
	志願者数	435	1.37	427	1.34	481	1.51	
市立金沢	募集人員	318	123	318	116	318	131	志願変更後若干倍率が昨年より上がる倍率に。面接試験では合否差がない事からレベルの高い戦いは避けられない。
	志願者数	441	1.39	434	1.36	449	1.41	
南	募集人員	38	36	38	12	38	21	志願変更後に3人しか変更者がいない事は、南高校の魅力なりこだわりをかなり感じる受験生の戦いが伺える。
	志願者数	74	1.95	50	1.32	59	1.55	
戸塚(単)	募集人員	279	167	279	128	279	80	毎年レベルが高い競争ではあるが、ここ数年志望者が減っている。それでもこの倍率は横浜市立高校故のものか。
	志願者数	446	1.6	407	1.46	359	1.29	
横浜栄(単)	募集人員	318	82	318	84	318	85	単位制高校としての人気は衰えていない。変更期間を経ても昨年と同倍率となることから安定した志願者を集めている。
	志願者数	400	1.26	402	1.26	403	1.27	
氷取沢	募集人員	358	76	358	94	358	46	定員割れをした蓋開けの数字にはほど遠い志願変更後の倍率1.13倍に増えた。ICTの進んだ環境は大きく評価したい。
	志願者数	434	1.21	452	1.26	404	1.13	
横浜南陵	募集人員	238	56	238	85	278	19	定員割れをした蓋開けの倍率は、やはり志願変更後に1倍を超える結果に。それでも1.07倍は予想外の低さとなった。
	志願者数	294	1.24	323	1.36	297	1.07	
舞岡	募集人員	318	38	318	45	318	68	志願変更後に倍率は下がったものの、平均値の1.17倍を上回る結果となった。バス通学ではない利点が考えられる。
	志願者数	356	1.12	363	1.14	386	1.21	
横浜立野	募集人員	238	−34	238	54	278	30	蓋開け定員割れの状況から一気に1.11倍の倍率となった。保護者からの厳しい評価も倍率には動かされたか。
	志願者数	204	0.86	292	1.23	308	1.11	
横浜桜陽	募集人員	270	−32	270	5	310	26	志願変更後、若干倍率が上がる結果に。舞岡高校からの志願者変更で多くなったか定かではないが厳しくなった。
	志願者数	238	0.87	275	1.02	336	1.08	
永谷	募集人員	198	−49	197	−96	199	−116	志願変更を経ても倍率はわずかな伸びにしかならず、下げ止まりが見えない状況で2次募集決定となった。
	志願者数	149	0.75	101	0.51	83	0.47	
釜利谷(クリエイティブ)	募集人員	238	−3	237	1	238	−93	倍率からクリエイティブ高校の中でも、県内では横須賀南に次いで人気があると言える。志願変更後、1倍の倍率に。
	志願者数	235	0.99	238	1.00	145	0.61	
みなと総合	募集人員	232	86	232	148	232	89	総合高校では昨年同様、横須賀総合と人気を大きく二分する結果となった。立地や設備の良さは人気は不動である。
	志願者数	318	1.37	380	1.64	321	1.38	
横浜清陵	募集人員	265	183	265	76	265	124	一時期ほどの高倍率ではないにしろ、県平均倍率を大きく上回る厳しい戦いになる事は間違いない。
	志願者数	448	1.69	341	1.29	389	1.47	
金沢総合	募集人員	278	48	278	62	278	38	14年をピークに倍率が下降している現状は、相変わらずである。横須賀馳駆からの受験者で倍率を維持している。
	志願者数	326	1.17	340	1.22	316	1.14	
横浜商業	募集人員	199	17	199	27	199	4	志願変更後に1倍をわずかに上回る結果になった。伝統の横浜商業でも職業高校離れの勢いは止まらないとみえる。
	志願者数	216	1.09	226	1.14	203	1.02	
城郷	募集人員	238	134	238	54	238	79	典型的な隔年現象状況似も思える。今年の倍率は志願変更を経て昨年より多い1.33と落ち着いた倍率となった。
	志願者数	372	1.56	292	1.23	317	1.33	
追浜	募集人員	278	139	278	81	278	72	横須賀地区の変わらぬ指示を受ける追浜高校だけに、志願変更後もほとんど変わらない数値となった。
	志願者数	417	1.5	359	1.29	350	1.26	

倍　率　の　注　目　点　事　項　の　ま　と　め

1 全日制146校では45，030人の募集に対して、47，513人の志願者数となり、県平均最終倍率は1．17倍となった。県教育委員会が指標とする1．2倍には若干届いていないものの、例年通りの数値となった。倍率トップは横浜翠嵐で2．25倍。続いて横浜国際バカロレアの2．1倍、神奈川工業のデザイン科の2．0倍出会った。

2 倍率が高い高校がある一方、定員を下回った高校は35校にもおよんだ。3，197人が3日間の志願変更期間を経て15校が結局定員以上の志願者になったものの、以前定員割れの学校数は少なくはない。港南中央教室近隣では、永谷高校の199人の募集人数に対して81人の志願者、0．41倍がひときわ目につく結果となった。

3 職業高校は、競争倍率が存続の指標ともなる。横浜商業の蓋開け0．98倍や志願変更後の磯子工業高校化学科の0．46倍、電気科の0．82倍、建設科の0．90倍、機械の0．94倍は今後の動向に注目をせざるを得ない。高倍率となっている、神奈川工業のデザイン科や相原高校のビジネス科といったように何か特色を持ったコースの設置が必要と思われる。特に磯子工業は神奈川工業や県商工との合併も視野に入れなければならないように思われる。

4 出願時の倍率は、そのまま生徒・保護者の人気度のバロメーターとなることから、人気がある学校とそうでない学校を見ることができる。志願変更前の倍率において1．0倍を大きく割った0．41倍の永谷高校や0．46倍のクリエイティブ釜利谷高校の存続は、今後大きく危ぶまれる。

5 南高校は、併設する中学校が一貫校として存在することから、公庫からの募集は1クラス分の38人となっている。一昨年の倍率の蓋明けは1．32倍、昨年は1．63倍、そして今年は1．55倍と相変わらず高倍率となっている。卒業生や地域住民から高校募集停止について大きな反対はあるものの、完全中高一貫校となる事はそう遠くはないように思われる。

6 横浜市内の総合高校においては、1．0倍の数値をかろうじて超えているものの、一時の勢いは全く見られない。みなと総合高校で1．38倍と県平均倍率は超えているものの、昨年より0．28ポイント下回った結果となった。麻生総合や秦野総合では1倍を下回っており、金沢総合で1．14倍、鶴見総合で1．09倍と、県平均倍率を下回っており、一時期の総合高校人気は見られない。

7 旧学区のトップ校の倍率は相変わらず安定している。横浜北部学区の横浜翠嵐高校は言うまでもないが、横浜中部学区の希望ヶ丘高校、横浜臨海学区の緑ヶ丘高校、鎌倉藤沢茅ヶ崎学区の鎌倉高校、川崎学区の川崎高校は1.5倍を超えており、その人気度を伺うことが出来る。しかし一つの区切りともなる1．5倍を超えていなくとも横浜南部学区の柏陽高校や横浜北部学区の川和高校は、伝統の元厳しい戦いは絶対に避けられない事は言うまでもない。

8 市立金沢高校の倍率は、昨年蓋開けの倍率が1．5倍に対して今年もそれに近い1．51倍となり、高いレベルの戦いが予想される。志願変更後においても倍率は1．41倍となり、厳しい戦いは避けられない。これは同じ横浜市立である隣の横浜市立大学の色々な恩恵が受けられるという事だけではなく、施設・設備などが保護者の間においても大きく評価されていることは間違いない。